

ヨネ・ノグチ論序説

——芭蕉とのかかわり——

深澤 忠孝

- はじめに
- 一 「水鶏塚」の記憶
- 二 芭蕉と其角の方へ
- 三 海の向うで
- 四 ヨネと芭蕉
- 四―(1) 直接の取り込み・引用
- 四―(2) 「詩境」の同質によって
- 四―(3) 表現の一部やイメージを借りて
- 四―(4) 芭蕉に触発されて
- おわりに

○はじめに

野口米次郎「ヨネ・ノグチ（一八七五（明8）～一九四七（昭22）」は、米・英・日本近代詩史上、極めて特異な詩人である。昨今の俳句の盛況、世界のハイク現象には驚くべきものがあるが、ヨネ（以下、こう書く）は後者のはるかなる火付け役、という見方が出来る。発火点は芭蕉であった。

約百年前のわが国、アメリカ、イギリスが舞台、英語・日本語両用ということもあって、伝記的事実、テキストの問題点は多い。今も利用されているらしい拙稿⁽¹⁾も、すでに古くなっている。大まかにだが、改めて要点を整理して本稿を始めたい。

一八九三年（明26）十一月三日、ヨネは横浜港からアメリカへ向けて出発した。三年後から英詩を発表し始め、一定の評価を受けた。十年後にはイギリスに渡って、ここではさらに高い評価を受けた。翌年、帰国してからも英詩を書き続け、やがて自らの英詩を翻訳、ないし二重創作という形で日本語による詩として発表し始めた。いくつかの恵まれた偶然はあったにせよ、この明治中期からのヨネの業績は注目に価する。

本稿はその検討の一環であるが、拠るべきテキストは問題点が多く、正確な目録さえないのが現状である。今、単行詩集に限って、一覧表ふうにして考察の便に備えたい。

A *Seen and Unseen: or Monologues of Homeless Snail*. 1896 (明29)

San Francisco Press. (U.S.A)

- B *The Voice of the Valley*. 1897 (明30)
The Doxey Press (U.S.A)
- C *From the Eastern Sea*. 1903 (明36)
The Unicorn Press (London)
- D *The Summer Cloud*. 1906 (明38)
The Shunyodo (東京)
- E *The Pilgrimage*. 1908 (明40)
The Valley Press. (鎌倉) & Elkin Mathews (London)
- F 二重国籍者の詩Ⅱ玄文社詩歌部 一九二二年(大10)
林檎一つ落つⅡ玄文社詩歌部 一九二二(大11)
- H 沈黙の血汐Ⅱ新潮社 一九二二(大11)
- I 山上に立つⅡ新潮社 一九二三(大12)
- J 最後の無踏Ⅱ金星堂 一九二三(大12)
- K 我が手を見よⅡアルス 一九二三(大12)
- L 表象抒情詩Ⅱ第一書房 一九二五(大14)
- M 第二表象抒情詩Ⅱ第一書房 一九二六(大15)

- N 第三表象抒情詩Ⅱ第一書房 一九二七(昭2)
- O 第四表象抒情詩Ⅱ第一書房 一九二七(昭2)
- P 人生詩集Ⅱ第一書房 一九二九(昭4)
- Q 宣戦布告Ⅱ目黒書店 一九四二(昭17)
- R 起てよ印度Ⅱ小学館 一九四二(昭17)
- S 八絃頌一百篇Ⅱ富山房創立事務所 一九四四(昭19)
- T 野口米次郎定本詩集1Ⅱ友文社 一九四七(昭22)
- U 野口米次郎定本詩集2Ⅱ友文社 一九四七(昭22)
- V 野口米次郎定本詩集3Ⅱ友文社 一九四七(昭22)
- W 野口米次郎表象抒情詩全集Ⅱ地平社 一九四七(昭22)

〔いくつかの補足〕

- ▼Cには、この元になった自費出版(8篇16頁)のもの、及び東京・富山房版がある。いずれも一九〇三年刊。
- ▼Hの註に「私のこれまでの邦語詩は自分の書いた英語の翻訳であったり又はその延長であったが、本詩集に於て私が真実の意味で、所謂百尺竿頭一步を進めたといふならば、私が表徴詩の象牙の塔を出でて人生の街頭に立つに至ったからである。」とある。
- ▼L、Oは、これまでの作品に推敲、加除、改題等をして再編、定本を目指したもの。当初六巻の予定であったが四巻に終った。

▼T・Vは文字通り定本を目指したが、これも中断を余儀なくされた。当初は六巻で次のような計画であった。

▼第一・二巻 表象抒情詩 第三巻 印度詩集、以上は実現した。

第四・五巻 人生詩集 第六巻 散文詩集、これらは実現しなかった。

▼Wの標題は一定していない。背表紙(背文字)が右の記載で、扉は『表象抒情詩 (全)、奥付は『野口米次郎詩集』とだけある。内容はT・V三冊の合本である。目次裏に、

「私の詩は半身像だ。

読者諸君、胸の下から刻んで、どうか完全な全身像として下さい。」とある。

一 「水鶏塚」の記憶

ヨネが「水鶏啼く」の句と「芭蕉」の名を記憶にとどめたのは、少年時代も早い時期であった。生家から一里ばかりの所に「水鶏塚」があったからである。

○ 水鶏鳴と人の云へはや佐屋泊

水鶏塚には右の句が石碑に刻まれて立っている。「塚」と呼称されることから分るように、単なる句碑ではない。信仰の対象ともなっている。

芭蕉は一六九四年(元禄7)の最後の旅で、五月十五日、佐屋に一泊して翌日、桑名へと発っている。佐屋にはこの時も含めて二回立ち寄っていることがはっきりしているが、もっと多かった可能性もある。

水鶏塚は一七三五年(享保20)五月十二日に建立された。芭蕉死後、四十年余である。この時、記念撰集として『水鶏塚』上・下二巻が編まれた。芭蕉画像があり、その画像誌に芭蕉の風采が記されているのが珍しい。

そのさま面長に背高からすひくからす頬そばたつて眉毛かが（や）く眼中すこやかに鼻は鈍骨の双柱耳厚く薄唇にして瘦かれたる形容とや……

現に塚は八幡社の一隅にあるが、木立ちに囲まれ、堂々とした感じで、ある種の雰囲気もある。祭り等の折はもちろん、時々近郊の人々や芭蕉崇拜者に拝まれ、語り継がれて来たのであろう。ヨネは、こう回想している。

然り、大なる芭蕉！ 余の郷里から一里斗りなる佐屋に 水鶏なくと人の云へばや佐谷泊り といふ石碑が立つて居るので 幼少より其人の大なるを慕ふては居た……（『世界眼に映じたる芭蕉』『中央公論』明38・9）

幼少から見聞し、馴れ親しんだものが、人の一生に与える影響は大きい。原風景、原体験とかかわりながらそれは、刷り込み現象よろしくその人生を生きていく。現代詩の書き手の一人で、現に作家でもあり、俳句もやるらしい稲葉真弓もこの近くで育ち、同じ様な回想をしている。⁽²⁾

「水鶏鳴く」の句は、二人の詩人を生み出した、というべきかもしれない。少なくとも二人の詩人の中に、原風景、原体験とかかわって生き続けた、とは言える。

二 芭蕉と其角の方へ

一八九〇年（明23）二月、十五歳のヨネは名古屋の中学校を退学して、四日市から海路で東京へ出た。青雲の志、

という質の行動であった。母方の叔父に釈大俊（鵜飼大俊）がおり、その血がヨネを駆りたてたのかもしれない。また、兄たちの影響もありそうだ。すでに長兄は測量技師として高崎に、二兄は商業人として日本橋に、三兄は僧籍にあつて芝増上寺で修学中であつた。直接には三兄を頼つて上京したが、間もなく徒歩で長兄に会いに出かけている。

おそらく長兄の縁であろうが、結局、京橋南鍋町二丁目（現在の西銀座、交詢社ビルのあたり）で測量会社を経営する磯長氏邸に寄寓することになる。磯長氏は社長ではあるが、離婚して一人住まい、酒脱な風流人でもあつたらしい。ヨネはそこに世話になりながら、予備校を経て慶應には入つたものの、あまり学業には身が入らなかつた。歌舞伎や寄席、小説や俳句に熱中し始める。同級生と回覧雑誌を作つて、俳句を掲載したりして、俳句熱は相当のものだつたらしい。正岡子規が『日本』を舞台に、俳句革新ののろしをあげた頃である。ヨネは西行を読み芭蕉を読み、なぜか榎本（宝井）其角に親んで行く。

一つは慶應に通う途中、ヨネは芝増上寺境内を通つていて、そこに住む「其角堂永機」という老宗匠の存在（これは後に触れる）。もう一つはヨネはこの前後に『江戸名所図会』に接し、それに親んだのだと私は考えている。磯長氏は測量会社経営という職業上、本図会を持っていたことは十分考えられるし、風流人でもあつたらしいから、こちらからもその所有の可能性が高い。

『江戸名所図会』は全七巻で、その「巻之一」は「天枢之部」、収めるところは現在の千代田区、港区、中央区のほとんど、墨田区・江東区の隅田川寄りで、文字通り江戸の中枢部である。ヨネが当時住んだ磯長邸はちょうどその中心に当たるような所で、そこから半径五キロ程の円を描けば、すべてがすっぽり入つてしまう。

最北端は両国橋、南は高輪の泉岳寺である。芝増上寺も慶應のある三田（御田）も、叔父釈大俊が一時繋がれた

という監獄のあつた佃島も入ってしまう。

同図会は、各名所の図絵の説明に、多く俳句を使っている。これには注目すべき江戸俳諧史上の意味もあるが、今は先を急ぐ。「巻之一」には特に俳句が多い。全二十三句、「巻之七」の二十七句に次いで多い。他はすべて一桁である。「巻之一」二十三句中、芭蕉が八句、其角が十二句で圧倒的である。この傾向は二〜七巻でも変わらない。次に「巻之二」の名所と芭蕉と其角の句の関係部分を図会の表記によりあげる。特に其角については、その著書から引用したり、住居跡を特記するなど、格別の扱いとなっている。

〔魚市〕

○ 鎌倉を生きて出でけんはつがつを 芭蕉

○ 帆をかぶる鯛のさわぎや薫る風 其角

〔祇園会——大伝馬町御旅所〕

○ 里の子の夜宮にいさむ鼓かな 其角

〔同右——小舟町御旅所〕

○ 杉の葉も青みな月の御旅かな 其角

〔十軒店——雛市〕

○ 内裏雛人形天皇の御宇かとよ 芭蕉

〔両国橋〕

○ この人数船じゆなればこそ涼みかな 其角

○ 千人が手を欄檻やはしすずみ 其角

○ このあたり目にみゆるものみなすずし 芭蕉

○ 壱両の花火間もなき光かな 其角

〔大門通〕

○ 鐘ひとつうれぬ日もなし江戸の春 其角

〔新大橋〕

○ 初雪やかけかかりたるはしのうへ 芭蕉

○ ありがたやいだいて踏むはしのしも 芭蕉

〔薬師堂〕

◎ 「天満宮」について、其角の『類柑子』の〈北の窓〉から引用、九行。

〔山王祭〕

○ 我らまで天下まつるや土車 其角

〔茅場町薬師堂〕

○ 夕やくしすずしき風の誓ひかな 其角

◎ 〔俳仙宝晋斎其角翁の宿〕

茅場町の薬師堂の辺りなりといひ伝ふ。元禄の末、ここに住す。すなはち終焉の地なり。

按ずるに「梅が香や隣は荻生惣右衛門」といふ句は、其角翁のすさびなる由、普く人口に膾炙す。よつてその可否はしらずといえども、ここに注して、その居宅の間近きをしるの一助たらしむ。

〔三ツ橋〕

○ 菊の花さくや石屋の石の間あひ

芭蕉

〔新川大神宮〕

○ 何の木の花としらず匂ひかな

芭蕉

〔佃島——住吉神社〕

○ 名月やここ住吉のつくだ島

其角

〔同右——白魚網〕

○ 白魚に価あるこそ恨みなれ

芭蕉

〔寒橋〕

○ 青梅や浅黄になりて秋のくれ

其角

〔泉岳寺〕

○ おもだかの鐘をひくなりかきつばた

其角

このように、まさに芭蕉、其角づくしである。他の句といえは宗鑑、老鼠、梅翁（宗因）が各一句、計三句である。

ヨネがやがて其角堂永機宗匠を訪ねた時、其角の名月の句を誦して宗匠を驚かしたり、喜ばしたりしているが、ヨネがこの頃其角に親んでいたことは間違いない。佃島の名月の句など、ヨネにはある感慨があつたかも知れない。叔父釈大俊が四日市で捕えられ、籠によって江戸送りになる時、祖母は街道で待ち伏せして籠を止め、食物などを

供して励ましたという話は、野口家の語り草だったという。その送り籠の道は仙島の監獄に繋っていた。

ともあれ、ヨネが其角に親んだ契機を私は、『江戸名所図会』を見、それに親んだことに求めているのであるが、もとより推定でしかない。ヨネは後に「其角論」(『蕉門俳人論』収)を書いてもいる。その思いには並々ならぬものを感じられる。其角堂永機と『江戸名所図会』、これ以外積極的な根拠らしきものは、推定といえども考えられない。かすかな希望をひとつ加えるならば「月」である。言われるように其角は、月の句の名手である。右の引用中にも二句ある。ヨネは幼時から、月の神秘性や美しさに憑かれていた(「私の言葉・第三」『二重国籍者の詩』)。次の引用も名月にかかわっている。

私はその頃京橋に住んで居って、芝の公園を抜けて慶應に通ったが、紅葉館のすぐ下に其角堂永機といふ俳人の家があつて、今日でも私の記憶に明瞭である。

(中略) 私が永機宗匠を訪問したのは仲秋の名月の晩であった。座敷は広く無かったと記憶するが、障子が開放されてゐて、家の前に林立してゐる松はのびくした影を畳の上に投げて居った。「先生、へ名月や畳の上に松の影」ですね」といって、私は眼の前の老人をぢっと眺めた。

(中略)「あゝ其角ですか、あなたは少年にしては偉い。どういふ句集をお読みですか、一つ聞かして下さい」といって、老人は膝をすり寄せて来た。

(「其角堂永機」)

其角堂永機は江戸末から明治後期まで(文政6〜明37)長齢を保ち、実作上はもとより俳諧史上でも貴重な仕事を残した。家系上では榎本(宝井)其角直系の人で、其角研究をはじめ著作も多い。『其角全集』『芭蕉全集』『おく

のほそ道』など、現在の研究の基礎の一つにもなっている。

「名月や畳の上に松の影」は、残念ながら『江戸名所図会』にはない。これを誦んじるほど読んでいたのであるから、ヨネは他の句集も何冊か読んでいることになる。当句が入っている其角の『五元集』がどれほど流布していたかは分らないが、ヨネはこれを読んでいたであろうから、其角への思い入れの深さは尋常ではない。

ヨネは続けて、この時、詩の心が「ぱつと眼を開けた」「僕は俳人になるのだ」と幾度も叫んだ、と書く。ともあれここでは、ヨネがそこまでのめり込んでいたことを確認しておけばよい。しかしヨネは渡米する時、其角関係のものは持たなかった。其角への熱中は、江戸（東京）の中枢住まい故の現象であつたようだ。抛るべきは、やっぱり芭蕉だったのである。

三 海 の 向 う で

それから、いくつもの曲折があつて、一八九三年（明26）十一月三日、ヨネは渡米した。以後十三年、約半年のイギリス滞在を除いてのアメリカ生活であつた。その間、決して大袈裟ではなく、「芭蕉」は座右の書であつた。旅行中でもヨネは、「芭蕉の句集と沙翁のソネットを携へてゐた」という（「三十年前の自然児」）。

「芭蕉の句集」は当然日本から持つていったものだろうが、当時そうしたテキストも少なかった。管見では「芭蕉句集」というものは見当らない。ヨネは当地で、連句や紀行類も読んでいるふしがあるので、ある種の「芭蕉全集」の類であつたろうか。当時は一冊本のそうした全集が割に流布していた。

渥美育子によれば、イサム・ノグチが保管していた遺品の中に『芭蕉翁絵詞伝付句集』があつたとい⁽³⁾う。これは

幸田露伴編で一九〇四年（明36）富山房刊であるから、渡米時の携行は出来ない相談であった。可能性が高いのは、花の本秀三編『纂註芭蕉翁一代集』（古今堂、明24）である。イサム保管の遺品には、外に『紅葉山人俳句集』『雨月物語』『孟襄陽詩集』『王右丞詩集』があったというが、紅葉山人の句集もその後の刊行（昭37）であるから、これらはおそらく、一九一九年（大8）の米国横断講演旅行の際、資料として持っていたものであろう。

ともかく、一九〇四年（明37）九月の帰国まで、ヨネの手元にあった日本文学、俳諧関係の文献は芭蕉のみで、それも一冊本の全集の類、さもなくばせいぜい二、三冊であった。芭蕉の文学の質、ヨネの惚れ込みようもさることながら、このことが芭蕉の「絶対化」（詩論、第二則、「前掲書」）を促したことも間違いないところであろう。

ところで、ヨネの五十余年に及ぶ詩的活動において、彼は何を歌ったのであろうか。例えば第一詩集 *Seen and Unseen* は、ミラー山荘の詩的雰囲気の中での「故国を離れた青年の哀愁と孤独」だとヨネ自身はいう（同集「註」）が、これは心情、詩境についての解説である。この第一詩集を含めてヨネが繰り返し歌ったのは、天地宇宙の神秘、人間と自然の調和、禅的「無」の観念、閑寂や沈黙への讃美と憧憬であった。誤解を怖れず、かつ大胆に言えば、芭蕉が歌ったのもそうであった。周知のように芭蕉は纏った詩論（俳論）は書かなかったが、時や場、弟子に応じて機能的に語ったのは、これらの意味と表現の方法であったと言えよう。美意識としての「わび・さび・しほり……」、本質論としての「不易流行」や「風雅の誠」「造化」論、方法論としての「即興感偶」その他。

少年期に「水鶏鳴く」の句から芭蕉に触れてきたとはいえ、また二十歳をすぎたばかりのヨネに、芭蕉の本質、偉大さがどれほど分っていたかは問題だが、「絶対化」する情熱的態度、強引さは若者の特権である。

ヨネは、その特権を十分に活用した。自らの運命は自ら切り開く、といった気負いもあったであろう。中学中退上京、慶應中退、志賀重昂邸への押し駆け書生、渡米、詩人への契機となったJ・ミラー山荘の下僕生活、すべて

かなり強引な特権の行使といつていいであろう。ミラー山荘の三年間（時に長期旅行にも出たが）は、詩人への至福の三年であつた。ミラー山荘は今では立派な公園になっているそうだが、当時はまさに山荘であり、ミラーの隠棲所であつた。日本風に言えば、庵を結んでの生活である。少なくともある種の共通項があり、そこで生活すると自体、詩というわけである。ミラーはヨネに、そう教えた。

私が山荘入りしてミラーの厄介になつたのは二十歳の時であつた。米国における生活難から逃れ、始めて平和の気分で自然を静観することが出来た。私の思想と感情が若い血汐に蒸されて、紫色の靄のやうに抒情詩となつて立ち上るやうに感じた。／ミラーの山荘といへば文字通りで、小さな荒屋あばらやに過ぎなかつた。山は小さいといつても、眼下に金門湾へ太陽が没する雄大な光景を眺め得る程度に高い。（中略）春になると全山花を以つて蔽はれたものだ……山を包んで仕舞ふ加州罌きんぽうけと毛良の美麗さ！加州罌はカリホルニアン・ポピーで赤黄色の単弁花である。夕方になると花を閉ぢ、翌朝太陽に照らされて再び花の盃を開ける。かういふ綺麗な花の褥の上で草雲雀が騒々敷いほど囀る。四月に入ると桜が咲き、桜が散ると李すももの花が咲き始める。（中略）私はかういふ愉快的春の空氣に触れて詩の世界へ一步一步と踏込んだのである。

（『三重国籍者の詩』、「註」）

こうして出来たのが *Seen and Unseen* だというのが、当然、様々の起伏や屈折はあつた。まず、ミラーが教えてくれたのは詩の読み方や書き方ではなくて、この山荘でする生活、その精神生活が詩だということであつた。ミラーの教えの原点、かつ最たるものである。

次に、E・A・ポオとW・ホイットマンへの道を開いてくれた。ヨネはこの二人のアメリカの大詩人の作品を夢

中で読み、イギリスの大詩人シェイクスピアの作品（主にソネット）も読んだ。ミラーを訪ねてくる若い詩人たちに接触し、刺戟もうけた。表現の手掛りをポオとホイットマンに求めて、詩を書き出した。しかしヨネの語学力を先の特権によって、「句法詩法等の口伝または規定等に拘束せられることなく、最も大胆に英語を使用して、彼の作品に供するに或は怪奇の質或は異様の華彩、また質実なる日本的優情を以てす。其語には色あり、其句には香あり」（新渡戸稲造、富山房版序文）ということにもなった。つまり、二人のアメリカの大詩人は歪められたり曲解されたりした面も大きく、強烈に押し出されたのは日本的心情だということである。その底に、芭蕉の影がくつきりに見えるのは当然である。From the Eastern Sea はロンドンで刊行されたのだが、作品はすべてアメリカで書かれたものである。

ヨネはミラーの山荘時代、ミラーをはじめ、訪ねてくる詩人達に、日本の大詩人芭蕉を大いに語り、俳句を語った。そして大胆に、その翻訳、翻案を試みるのであった。さらには「発句形英詩」「発句詩」にも手を染めた。「詩仙ミラーと山居の日記」（『英文新誌』明37・3）によると、その数は膨大なものであったらしい。現在残っているのは、種々の著作に挿入された断片的なものが多い中で、『二重国籍者の詩』に収められた「小曲詩 五十八篇」は、最も纏ったものである。

落葉か？

生命の寂寞に乗って行く、

僕の霊だ。

（第七）

助けて呉れと薔薇が叫ぶぢや無いか。

どうして助けられるものか、

僕自身、実際、その薔薇だもの。

(第十七)

落ちる木の葉、否な靈魂、

僕はお前と共に

運命の流を降つて行かうか？

(第二十七)

今、七のつく三篇を引いてみたが、これらが「発句形英詩」「発句詩」である。元々英語で書いたものを、自訳したものである。そして「小曲詩」と名付けた。また「小曲」とも言っている。俳句を「絶対化」して英語で試みても、結局そこに表現されているのは「日本的優情」(新渡戸)である。それは翻訳しなくてもそうで、翻訳してみると、かくも歴然とする。

古典的句、現代俳句、いずれとも直接比較等は出来ないが、ヨネが俳句的世界、俳句的精神を懸命に表現(元は英語)しようとしていることは分るであろう。それは英語圏の人々に伝えようとする懸命の努力でもあった。

四 ヨネと芭蕉

ヨネは、芭蕉について多くの文章を書いている。「世界眼に映じたる芭蕉」(『中央公論』明38・9)が最初で、帰

国後一年であつた。これを現在読むと問題点が多く、ヨネの理解に疑問が残るが、こうした視点から書きうる詩人、俳人は当時なく、大いに注目されたようである。翌月、俳句の専門誌『卯杖』に転載されている。次は二十年後、やはり『中央公論』に「芭蕉」を書いた（大14・11）。これはまさに自在に芭蕉を論じた、二段組みびっしりで三十五頁もある長篇評論であつた。ヨネの芭蕉享受、摂取、同化、創造過程も含んでいて貴重である。このまま単行本『芭蕉論』『俳人芭蕉』、後者は部分）にもなっている。

ヨネは「芭蕉」を書いた時、すでに六冊の日本語の詩集（F-K）を出していた。従つて「芭蕉」にはそれらの詩集への摂取、同化、創造の過程も反映している。本節では具体的に作品をあげながら、そのかわりを探つてみる。

四―(1) 直接の取り込み・引用

まず、ヨネは、芭蕉をどのように自分の詩に取り込んだか、あるいは引用しているか。

棒 高 飛

自然の棒高飛は素晴らしい、

その最後を御覧なさい、

手に持った棒を見事に捨てて仕舞ふ。

椿は潔くぱらりと花の棒を捨てる、

秋の地上に黄金の葉を撒きちらす公孫樹は、

ああ、何といふ立派な棒高飛だらう。

自然は捨つべき時に凡てを捨てる、

その態度に微塵の狂ひがない、綺麗だ、

捨てることの出来ない人間は愚かだ……

自分を支へる棒にどこまでもかぢりつき、

自ら飛躍を否定して醜態を作る。

芭蕉句あり

「一つぬいて後ろに置きぬ衣更。」

（『野口米次郎定本詩集2』）

歌仙の「挙句」の趣きで、一篇を芭蕉の句で結んでいる。短篇小説のサプライズ・エンディング（落ち）の趣きもある。しかし問題は、この引用句の理解には重大な誤解があることだ。正しくはこうである。

○ 一つぬいて後に負ひぬ衣がへ

『笈の小文』中の句で、初案は「一つ脱でせなに負けり衣がへ」（芭蕉庵小文庫）と考えられ、外にも二句類句がある。いずれにしても「負ひぬ」「負ひけり」と「置きぬ」では、全く意味が違ふ。ヨネが、ある意図のもとで替えたとも考えられるが、そうすると、「」の意味が薄くなる。

はつきりしていることは、誤解にせよ意図的にせよ、ヨネはこの句を長く意識にとどめていたということである。当然それはある感動を伴っていて、自らもこのような作品を書きたいと考えていたのであろう。ヨネはこの句から、何より爽さを読みとっている。芭蕉本来の句には、衣更といっても荷物として背負って行くのであるから、そうい

う爽さはないのであるが、例によってヨネ一流の強引きである。ヨネの意識の中では、芭蕉の美意識とモチーフを借りてということであるが、句が誤解であるならば、致命的である。

次は、芭蕉句をエピグラムした例である。長い作品なので、冒頭だけの引用にする。

月 夜

明月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉

悲しき月は山を、

われは静かに町を離れ

漸くにして、われ、悲哀の思ひを

声なき風に振り落せり。

(以下35行略、『表象抒情詩全集』)

初出は *From the Eastern Sea* である。ということは、元は英詩である。このロンドン版は見る事が出来ない。軽うじて富山房版を見ることが出来た。その題は“By the Sea”で、エピグラムはない。

日本語による初出は『日本詩人』(大15・4)で、題は「抒情詩」、この時からエピグラムが付された。管見ではヨネの詩でエピグラムがあるのはこの作品だけである。それが芭蕉句であることで、ヨネと芭蕉の関係、というよりはヨネの芭蕉への深い傾倒を示す例として注目される。これは引用も正確である。

エピグラムの機能は多様であるが、一般的には、エピグラムが作品の主題や全体の情調を表象することが多い。

「月夜」の場合もそうである。

問題は、英詩の場合になかったのに、日本語に自ら訳した際にそれを付したことにあろう。ここには明らかにヨネの、わが国の読者へのアピールの意図があると考えられる。

富山房版には、新渡戸稲造、和田垣謙三、志賀矧川しんせん（重昂）という錚々たる面々の序文があるが、三人はよくヨネの行動を理解し、心情を支え、かつ支援、励ましを惜しまなかった。ここでは新渡戸の序文の一節を引く。訳は桜井鷗村である。

故国の記憶は、曾て彼の熱烈なる胸中に亡ぶこと無く、シエラの山谷も彼をして儼たぐひ無き富士の姿を忘却せしむること能はず。カリフォルニアの清澄なる空気の中に在りて、彼の想像は稲田に立つ。夕暮の霧に漂ひ、昂然たるセクワイアの木より転じて、洵美なる日本の楚々曲々たる松樹に心を寄せ、莊嚴にして天地共動くエローストーン大公園に在りて、桜咲く花園を夢む。（中略）其詩は彼の生れたる地点と、其仮寓せる地と消息を共に洩し、彼等は東邦、西土の資すべき結合の生みたるものなり。

新渡戸はヨネより一回り上で、札幌農学校卒業後、米・独に留学し、国内外で大いに活躍した。思想家、教育者としてよく知られているが、国際連盟の舞台で活躍した外交官でもあった。その眼はさすがで、ヨネの本質に迫っているが、アメリカの自然や社会で生活しながら、常に日本のそれを見ていたのだという指摘は聴くに価しよう。もつと直接、具体的には、ヨネ自身の日記がある。⁽⁴⁾

千八百九十八年四月三日、空氣溫和、牛乳溢れ棕櫚高く星を払わんとし、人心優々、所謂トロピカルの感觸を得んため、加州南部を旅行せんと決心した。(中略) 余此の無錢旅行を苦と思わず、一大宝庫に身を入れるの思あり。自然との接近！ 月出でぬ。砂上に横たわつて故郷を思い出した。「三笠山」の古歌を思わざるを得なかつた。九時半十時と成ると砂上を逍遙して居た人々は帰宅して、余のみ独り寂寞たる天地の上大洋の側にあつた。沈黙は雄弁なりとは宇宙は何等の事を語る。寂寞は單純にして寂しきものにあらず温かで親しきものである。余は孤独の生活を愛せり。余は終夜洋岸を散歩せんと決心した。余一詩を作つた。

渥美の努力によつて、ヨネの伝記的研究は格段に進んだことは特筆されていい。この詩についても、その背景とモチーフがこのように知られることになった。アメリカ西海岸の彷徨、日暮れからの逍遙、月を見ながらの望郷、古歌の想起、終夜の孤独の散歩、月との沈黙の對話、逆には月との一体化からこの“By the Sea”＝「月夜」は生れた。

新渡戸の指摘にもあつたように、ヨネはアメリカ西海岸を彷徨しながらも、その心象は三保の松原や富士山に繋がっていた。そして、アニマチズム的心象が想像力をつき動かして「余一詩を作る」になつたわけであるが、その過程で阿倍仲麻呂が出てくることも興味深い。しかし“By the Sea”から「月夜」が成立する時、仲麻呂ではなく芭蕉が選ばれたことは、より注目されなければならないことである。

○ 天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも (古今和歌集)

○ 名月や池をめぐりて夜もすがら

「天の原」の歌は、月の夜のまさに望郷歌であり、「名月や」は月夜の佳興そのものである。芭蕉の心象と行動とその表現が、ヨネのそれと一致していたと言っている。「天の原」の歌がエピグラムされるはずはなかった。

四―(2) 「詩境」の同質によって

ヨネと芭蕉の関係の、第二の類型である。

影の放浪者

眼には見えねど神の御手に招かれて、

そよ吹く風の如く、聖き空をめぐる。

胸に秘むる一曲の歌……我等は祈禱の童僕^{わらべ}だ。

我等の歌は、亡びし都城の跡を知らず、

王国の哄笑も我等の足を止めない、

我等の心は遠く、太陽、風雨を友として、

聖なる大路をさまよふ……ああ我等は影の旅客だ。

(『野口米次郎定本詩集1』)

構成は単純だが、漂泊の主題は深い、といえるであろう。私は一読、『おくのほそ道』を想起（特にその冒頭）したのだが、ヨネ自身に次の証言がある。

彼の最大旅行奥羽行脚はその翌年三月下旬に始まる。芭蕉時に四十六歳である。「月日は百代の……（以下略）」これが奥之細道の書出しの言葉である。これは正に私が左（注「影の放浪者」）を書いた時の詩境であろう。

（俳人芭蕉）

芭蕉の「詩境」を、自分のそれを基準にしているという大胆さは面白いが、事實はまさに逆で、おそらくこの前後、日常的に念頭にあった『おくのほそ道』の冒頭が、ある時モチーフとして立ちあがり右の詩を書かせたのだろう。芭蕉の求道的、詩的巡礼ともいふべきその行動と表現に、ヨネは一つの理想をみており、強い憧憬を持っていた。

「眼には見えない神の招き」は、芭蕉の「そらる神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて」とまさにパラレルであり、主体を「我等」と複数形にしているのは、芭蕉と共にというヨネの矜持なのだ。こうした姿勢は他の詩にもある。

「新しい詩は私をもつて始まらねばならない。」

かう私がいつたら人は私を許すでせうか……

許さなくてどうしませう。

毎朝咲く朝顔を御覧なさい、どの朝顔でも、朝顔の美は自分をもつて始まるといふ誇りに輝いてゐるではあり

ませんか、

（「存在の独立」冒頭、『山上に立つ』）

全体は右の約五倍ほどで、いささか饒舌、こなれきれない日本語で、理屈っぽく「表象抒情詩」にはほど遠いが、ヨネがこの詩に込め思い入れたものは深かった。そしてまたそれは、芭蕉に導かれてのものであった。

私は芭蕉に感謝するところが多いが、特に「風流のはじめや」の言葉（注、風流のはじめや奥の田植歌）に於て感謝せざるを得ない。芭蕉自身は偶然に吐いた軽い言葉であったかも知れないが、私が家宝のやうな尊い教訓を得たからとて、彼に何の異議も無いであらう。私は詩歌からこの教訓を人生に及ぼし、左の句を「存在の独立」と題する詩の中に書いた。

（詩の引用、冒頭五行、略）

芭蕉の「田植歌」の句には前書がある。乍単斎と等窮の二人に逢って詩歌を物語った心持は、昔支那の詩人が陽関を出づれば故人なからんといったが、今は全く陽関を出でて故人に逢ったやうだと書いてゐる。私がこの句を始めて味った時は、私が詩人ミラーと同居し所謂肝胆相照らす感があつた頃だったから、一入印象が深かつたことを書添へたい。

（「芭蕉名句選釈」）

ヨネの日本語にはこなれきれないところがあつて、引用部にも本意がどこにあるのか理解に苦しむ箇所がある。詩集『山上に立つ』は日本語の四番目の詩集だが、直接日本語で書かれた詩集としては二番目である。つまり、一・二番目（F・G）は自分の英詩の翻訳、ないし二重創作的なもので、三番目の『沈黙の血汐』からが直接日本語で

書かれた。逆に、この『沈黙の血汐』は、「他日これ等の詩も英訳して発表したいと思ひます」（「自序」付言）と、英訳を予定していた。したがってそこには、気負いのようなもの（裏返せば不安）があり、まだ、日本語による詩の自立は果せないでいた。これに次ぐ本詩集で、日本語による自立と自律を果したいというのは、ヨネの強い願いであった。まさにその「存在の独立」への、たぎる思いをこめた詩だったのである。

思いや観念が先走って、理屈めいて、詩的形象が不十分なのはやむをえないとしても、その手掛りを改めて芭蕉に求めていることは、注目しておきたいところである。

ヨネが芭蕉を読み始めたのは、渡米前の慶應時代（其角もほぼ一緒）であった。渡米には『芭蕉全集』を携えて、特にミラー山荘時代、ミラーやミラーを訪ねてくる若い詩人たちと芭蕉を語ったことは先にも書いた。しかも当時から、連句や紀行の類も読んでいたようである。しかし、俳文にまで及ぶのはおそらく帰国後であったと考えられる。『おくのほそ道』を読めば、「風流のはじめや」の句には出会えるが、「奥の田植歌」の「前書」には出会えない。先の引用は、俳文の「奥の田植歌」を読まなければ出来ない相談である。「前書」と言ったり「乍単斎等窮」を二人とするなど、杜撰さはあるが、かなり俳文も読んでいたようである。俳諧や芭蕉を専門的に学んだわけではなから、こうした間違いも愛嬌の部類であろう。大切なのは、芭蕉を手掛りにしてわが詩の「存在の独立」を果そうとしている姿勢である。「新しい詩」の創造、「新しい人間」の創造を期して、「自分と大きな自然との対照を慎しやかに」表現すること、限りなく「昨日の私」から「今日の私」になることへの努力、これは取りも直さず、芭蕉の姿勢、態度、方法でもあった。特筆しておきたいのは、「さびしさや華のあたりのあすならう」（笈日記）を超えようとしていたその姿勢である。

この類型には他に、次のような作品がある。

① 「春」 『沈黙の血汐』

初出以前は、書き出し「春を圍繞する沢山の人」が「芭蕉を圍繞する沢山の人」であった。自然の生命、詩人の生命から芭蕉の悲しみに触れていく作品である。

② 「芭蕉」 『山上に立つ』

詩句中に「俳人芭蕉は芭蕉の葉の破れ易いことに興味を持った」他がある。また、明かに「はせを植てまづにくむ萩の二ば哉」(続深川等) に関っている。

③ 「菊」 『最後の舞踏』

詩の存り方を、特に時間との関係で捉えようとした作品で、芭蕉の「不易流行」の説と関っている。

④ 「月夜」 『表象抒情詩全集』

鎌倉、円覚寺蔵六庵逗留時の体験に基づく作品で、芭蕉の数多い名月の句と関わる。

⑤ 「人生の全課程」 典、拠、未、詳。

安部宙之介が『現代詩鑑賞講座 4・生と生命のうた』(角川書店、昭44・6)の「野口米次郎」で紹介しているが、典拠未詳。安部は『我が手を見よ』(昭12・5)所収の「悲の箱」と同じ頃書かれたとしている。四十八行に及ぶ引用だが、本文にも致命的なミスがあると思われる、このままでは詩としての受け入れにも疑問がある。ここでは、次のような詩句があることだけを記録しておきたい。

芭蕉の言葉に「或る時は倦て放命せん事をおもひ、或る時はすすんで人に勝たんことをほこり、是非胸中にたたかうて是がために安からず」とありますが、

私の心境は即ちそれなのであります……かくて私ももうじきに五十になります。

四―(3) 表現の一部やイメージを借りて

第三の類型は、芭蕉の表現の一部やイメージを借りての表現である。

蟬の震動、

(誇りある存在の音)

岩にしみ入る。

樹木の影、

あらゆる夏の暑さを感じて

もの静か。

右は『第二表象抒情詩』所収の「同盟罷工」の部分。初収の『三重国籍者の詩』では「一日の午後」と題されていた。これが「閑さや岩にしみ入る蟬の声」(おくのほそ道)のイメージを借りているか、同句をふまえての表現であることは、改めていうまでもないであろう。「震動」とは、いかにも大袈裟な表現だが、「誇りある存在の音」だというのは、これでいいのかもしれない。

以下に続く部分では、音もない、目に見えないもの、形はあるが、あえかな「影」の存在感は「静か」さの中にあるという。まさに「静か」な午後三時に、突然、「同盟罷工」(ストライキ)の号外が表を駆けて行く。ヨネには

珍しく現実感、社会的関心の深い作品である。その始まり（冒頭）を芭蕉の「閑さ」を借りて書くのは、熱心な芭蕉崇拜者ならではのところである。

なお、途中にある「……時は／午後、／三時。／庭の外に」という表現は、上田敏訳のR・ブラウニングの「春の朝」（『海潮音』）を思わせることを付記しておく。

芭蕉もヨネも、蟬への関心が高かった。次の「蟬」は少し長いが、全文引用したい。

蟬

老いた魂の何といふ苦悶であらう。

その声は涙で、その涙は即ち声だ。

お前は胸を張裂き、何といふ忘れ難い悲劇を語るであらう。

火でその胸を焼く森林の歌ひ手よ。

お前は世界に、それとも、私の愛の生命に叫ぶのか、

お前の単調の叫びは、私の悲しい歌の叫びであるだらうか。

生命の悲哀を読む^{たましい}霊だけが、お前の胸の痛みを知る。

世界は亡び、人生が死の勝利を得るまで、叫べ、叫べ、

信仰の悲劇を体験して、私共に死を齎^もたらしめよ。

悲しい信仰の歌ひ手よ、たつた一つの歌の歌ひ手よ。

生命を泣きつくせ、古い涙の夢を焼きつくせ。

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンミンミン……

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンミンミン……

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンミンミン……

(『表象抒情詩全集』)

初収『林檎一つ落つ』では「蟬へ」であったが、『表象抒情詩』『野口米次郎定本詩集1』では「蟬」と改題され、本文にもかなり手が入っている。右の典拠では題は「蟬」のままで、本文は初収の形に近くなっている。

『同盟罷工』では「閑さ」だったが、こちらは賑かな蟬で、主題は生と死にかかわる。ここに、芭蕉の次の句のイメージがあることも間違いのないところであろう。

○ 撞鐘もひゞくやうなり蟬の声 (笈日記)

○ 頓て死ぬけしきも見えず蟬の声 (猿蓑)

一節では「お前」との間に距離があり、二節では近づき、三節ではまた離れる。「お前」は「忘れ難い悲劇を語り、「生命を泣きつく」し、「古い涙の夢を焼きつく」して、やがて死ぬ。「愛の生命」を生きている「私」とて、やがては死ぬ。この意味で「私の悲しい歌」と「お前」の「たつた一つの歌」は、パラレルである。共に今は「死ぬけしき」も見えない、ミンミンミンのリズムに乗っている。しかし、いずれ死ななければならない宿命を「ミン、ミン、ミン、……」のルフランで暗示する。カタカナの形象は非常に視覚的でもあり、音楽的、絵画的余韻や残像によって、より深く宿命を感じさせる。ヨネには珍しい工夫である。

この類型の中で、際立った面白さを示すのが「飛行機」である。「一茶」も同時に登場する。解説などは不要、これもヨネには珍しく、明るく、軽快に展開していく。『表象抒情詩全集』により、さわりだけを引用する。

芭蕉は石山の石より白い秋風を見たが、

私は今、地中海の波より青い秋氣分を味ってゐる……

私は廊下に寝そべりながら、瑠璃紺色に高い空を眺める。

金比羅参りおんひらひらの蝶を見た男は一茶だ。

四―(4) 芭蕉に触発されて

第四の類型は、芭蕉の句や文章から示唆をえて、あるいはそれに触発されて書かれた作品である。これについてはヨネ自身、『芭蕉俳句選評』（野口米次郎ブックレット11）他で明らかにしている。それを元に、若干の考察とコメントを付すことにする。まずは目出たい、新年の「蓬萊」からにしたい。

蓬萊の島

千羽の鶴が諧調の音楽を響かし、

山々は瞑想に入って、神様のお呼び出しの声がかかるのを待つ。

永却は想像の羽をのばして彷徨ひ、

百足の亀は青い松の木のもとに蹲る。

ああ 青い青い天鷲絨の天は高く、

青い青い鏡の海は島をめぐり、

永遠の催民家^{マヤ}をうたつて、その魂を和らげる。

ここは不老不死の蓬萊の島……

温い春風に乗り、

汝の魂の船を海岸へ寄せ給へ。

『表象抒情詩全集』により、誤植と思われる部分もそのままにした。この作品を触発したのは、芭蕉の次の句である。

○ 蓬萊に聞かばや伊勢の初日より (炭俵)

句の「蓬萊」は、正月の祝儀物である。ヨネの詩の方は、幻想のユートピアの「蓬萊島」である。言葉の論理だけでいくと説明しきれない点もあるが、これはヨネの日本語の特質とヨネ一流の飛躍である。

芭蕉は「蓬萊」を前にして、これから伊勢の「初日より」を聞きたいと願い、聞くことで正月の清々しきや目出たさを、さらに祝福したいと思う。ヨネはそれを「蓬萊島」として魂の救済を願う。伊勢は「しきなみ・とこなみ」寄せる国である。波の彼方にユートピアをみていた日本神話以来、伊勢はそれに直結している国であった。ヨネの想像力は芭蕉の句に触発されて、それを直観している。

この類型には他に、次のような作品がある。句と詩題と典拠をあげておく。

① かたつむり角ふりわけよ須磨明石 (猿蓑)

「蝸牛」*Seen and Unseen*. (明界と幽界) ↓ 『表象抒情詩全集』

なお *Seen and Unseen* は “Monologues of Homeless Snail” の副題が付されていたことを忘れてはなるまい。

② うぐひすの笠おとしたる椿哉 (猿蓑)

「椿の小舟」『沈黙の血汐』

③ 山里はまんざい遅し梅の花 (真蹟懷紙)

むめがゝにのつと日の出る山路かな (炭俵)

「形体の釈放」『山上に立つ』

以上、ヨネの芭蕉とのかかわりを、詩の方法を中心に(1)～(4)に分けて考察してきた。おおまかに言えば、この(1)～(4)は、順序性でもあるのだが、ヨネの六冊の日本語の詩集(F～K)は二年半という短い期間に一気に出版されているので、それぞれに特徴的な手法、主題を指摘するようなことはむずかしい。ただ、さらに大まかに言えば、(1)では撮取——創造と短絡的なものに対して、(2)以下では撮取——同化——創造という自家薬籠への過程を踏んでいると言えよう。

ともあれヨネにとって芭蕉は、詩的、さらに広く文学的な原点であり、目指す到達点の一つでもあった。

○ おわりに

意図して引用を多くしてきたので、紙幅を尽してしまっても残された課題は多い。しかし、これまでの多くのヨ

ネに関する論考が、いきなり国際詩人として、あるいは比較文学的方法に限られている現状に、異なった視点から一つの照明をあて得たように思う。

この稀有の国際詩人を、トータルに把握、評価、記述することは、そう容易^{たやす}くはない仕事である。一つ一つの事実や事績を丹念に積み上げていくのが、やはり王道であろう。最終的な私の課題は「ヨネ・ノグチ論——国際詩人の光と翳——」である。そこへ向かって、こうした小論を重ねつつ進みたい。

〔注〕

(1) 拙稿「野口米次郎」Ⅱ『現代詩の解釈と鑑賞事典』旺文社 一九七九(昭54)

(2) 稲葉真弓「鑑賞」Ⅱ竹西寛子『松尾芭蕉集・与謝無村集』小学館 一九九六(平8)

(3) 渥美育子「ヨネ・ノグチ関係英文書簡について」Ⅱ『詩人ヨネ・ノグチ研究』第三集 造型美術協会出版局 一九七五(昭50)

(4) 同右。

なお、渥美には「ヨネ・ノグチ文献(一) 日本篇その一」Ⅱ『比較文学』一九六九(昭44)一〇と「ヨネ・ノグチ文献(二) 日本篇その二・外国篇」Ⅱ『比較文学』一九七二(昭47)一〇、という貴重な労作がある。

(97・5・7)